



&gt;&gt;&gt; 自分時間

ANOTHER ACTIVITY —もう一つの活動から広がる世界&lt;&lt;&lt;第2回

# 「ついで」に始めたボランティア で目指す心豊かな社会

## —里山の持つ「心を開くチカラ」を生かして

「ついで」に始めた  
ボランティア

2009年に私が立ち上げた「NPO法人東京里山開拓団」は、都心在住の20〜40代の社会人20名と学生20名を中心とするボランティア団体です。活動の柱は、東京・八王子の荒れた山林を児童養護施設の子どもたちと共に開拓し、里山の恵みを生かしながら自らふるさとを創り上げる「児童養護施設との里山開拓」です。これまでに、3つの児童養護施設と合計67回の里山開拓を行い、家族と離れて暮らす延べ約400名の子どもたちが参加しました。

東京里山開拓団の活動は、環境保全と児童福祉の一石二鳥で、前例のない試みとして注目いただけようになりました。昨年には、環境省「グッドライフアワード 環境大臣賞最優秀賞」と、厚生労働省「健康寿命をのばそう！アワード 子ども家庭局長賞優良賞」をダブル受賞しています。

こうお伝えすると、もしかしたら、どれだけ自分を犠牲にして活動してきたのだろうと思われたかもしれません。でも正直に言うと、自分を犠牲になんて考えたこともなく、ただ楽しみながら、ついでに拡げてきただけなのです。36歳の時にアウトドア趣味が高じて始めた荒れた山林通いがあまりにも面白くて、ついでに幼少のわが子連れでいつて遊ぶようになり、ついでに仲間も誘って一杯やるようになり、ついでに環境保全も、ついでに児童福祉も、と拡げてきた活動なのです。

さらに、私自身はついでにキャリアプランも見つめ直して、47歳で大手システム開発会社を退職し、50歳になる現在は週3日だけ情報サービス会社で働き、あとはライフワークに没頭できるセミリタイア生活に入っています。

今、私は仕事でも得られなかった大きなやりがいを感じています。児童養護施設の子どもたちは虐待や貧困などで命の危険に



NPO 法人東京里山開拓団 代表  
堀崎 茂

。 [ほりさき・しげる] 週3日勤務のサラリーマン、個人投資家、マインドフルネス講師、二児の父としての顔も持ち、現代都市社会がどうしたら本当に心豊かに暮らせるか自分を実験台に試行錯誤中。

さらされていた経験から心に深い傷を抱えていて、心理の専門家に対しても心を開くまでに半年はかかると聞きます。

でも、私たちの活動に参加すると、初対面の大人にも子どもものほうから心を開いてくれます。活動への参加は施設内で競争になるくらいの人気ぶりだそうで、里山は「自由な世界」「自分のウチみたいな場所」とまで言ってくれるのです。

みんなが喜んで活動することで、荒れた山林が大したコストもかけずに保全され続けます。長年その道の専門家や行政機関、事業者でも到達できなかった、「効率的かつ低コストで永続できる児童福祉&里山保全」という目標実現が見えてきたのです。

どうしてこんなことが「ついで」に実現していったのかについて、キャリアプランに関心のある読者のみなさんに少しでも参考となりますよう、私の考えたこと、取り組んだことを、できるだけ率直にお伝えします。



## >>> ANOTHER ACTIVITY—もう一つの活動から広がる世界



間伐した木で手作りしたはしごを  
展望台に取り付け

### 里山での試行錯誤

2005年、私は名古屋から東京に引越してきました。それまで取り組んでいたベンチャー事業がうまく行かずあきらめて転職してきたのです。自らの力不足を痛感しつつ、何かでリセットしたい苦々しい思いも抱いていました。しかし、東京でのサラリーマン生活も慌ただしいばかりで手ごたえがなく、早くも息苦しさを感じていました。

翌年、何十年も入っていない荒れた山林を親類が八王子に持っているという聞き、アウトドア好きの私はすぐに飛びつきました。いざ行ってみると、数十年もの間、人が入ることのなかった山林には藪がうっそうと生い茂り、道らしい道もありません。「里山」と聞くと心地よいふるさとのイメージがあるかもしれませんが、荒れた山林はそんな

生やさしいものではありませんでした。開拓は、泥だらけ・汗まみれになり、虫に刺され、道に迷いながら、時に不審者・変人扱いされながらの作業でした。それでもやめようとは思わなかったのは、そこに仕事や生活にちよつと疲れた心を解放してくれる私だけの場所と時間があつたからです。

2年ほどでようやく道や広場ができて、展望も開けて、徐々に心地よい里山空間に生まれ変わっていききました。私は生まれたばかりの子どもを背負っては家族で通い、仲間を誘っては居酒屋での飲み会代わりに通うようになりました。すると、大して何もない場所のはずなのに、みんなが口をそろえて「絶対また来たい!」と言うのです。

私は「これは何か里山にはとてつもないチカラがあるぞ」「このチカラを何か社会のためにも活用できないか」「ここを一番必要としているのは誰だろうか」と妄想を大きく膨らませました。そこから「家族から離れて暮らす児童養護施設の子どもたちにとって、ふるさとのような大切な場所になるのでは?」という思いにたどり着いたのです。

とは言っても、話は簡単には進みませんでした。2009年に任意のボランティア団体を立ち上げたのですが、参加してくれる児童養護施設が見つかりません。メール、電話、手紙、訪問を重ねたものの2年間は足踏み状態。要するに信用がなかったんでしょうね。今になってみると、何の実績もない変わった趣味の中年男と荒れた山林なんかに行って、

大事な子どもに何かあつたらという施設側の気持ちはよく分かりますが…。

道が拓けたのは、藁をもつかむ思いで東京ボランティア市民活動センターに相談したところからです。共感してくれた相談員の方が、児童養護施設に勤務する大学時代の先輩を紹介してくれたのです。その方は、大自然の中にある施設に勤めた経験があり、東京にもそんな場所があるなら子どもたちがどんな反応をするのか、とにかく一度行ってみようという話になりました。

そこからはトントン拍子に事が運び、今では子どもたちや職員からの絶大な支持を受けて、毎月1回ほどのペースで活動を継続しています。ただ、八王子の小さな里山だけでは3つの児童養護施設と活動を進めるのが限界でした。今年からはあきる野の広大な山林の開拓にも着手し、いつか東京中の児童養護施設にまで活動を広げたいと思っています。

日本全体では九州と同じくらいの面積の所有者不明の荒れた山林があると言われ、獣害や土砂崩れ、不法投棄、環境破壊の温床となっています。また、全国には約3万人もの子どもたちが児童養護施設で暮らしていますが、それも虐待や貧困に苦しむ子どもたちのほんの氷山の一角にすぎません。

私たちの10年余りに及ぶ取組みは、里山の持つ「心を開くチカラ」と人間の持つ「試行錯誤を楽しむチカラ」を最大限に生かすことで、環境保全と児童福祉を一石二鳥で変えていける可能性を示しているのです。



## 里山で キャリアプランを見直す

一方、私自身については、山林の開拓やボランティア活動と並行して、自分のキャリアプランの見直しも進めていました。里山に入ると、一人になって自分を静かに見つめられる時間がたくさんあったからです。

その時私の心に鳴り響いていたのは、Apple 創業者のステイブ・ジョブズが大学卒業式のスピーチで述べた「Connecting dots」という言葉でした。彼は学生時代、文字装飾の授業に忍び込んだこと、自分が創業したAppleから追い出されたこと、その代わりに映像制作会社を立ち上げたことなど二つ二つの小さな出来事(dot:点)をつなぎ合わせて、「Connecting」Appleを世界をリードする巨大企業に成長させています。

私の場合、「アウトドア・DIY好き」「ボランティア活動」「経営コンサルティング・ベンチャー経営の経験」というdotsが思い浮かびました。正直どれも一つ一つは大した結果を残せた訳ではありません。でも、Connecting dotsの考えに従うなら、凡庸なことも今の時点ですなご合わせて意義を見出して行く作業こそが、キャリアプランの見直しでは大切です。私が再定義したキャリアプランは、次のようなものでした。

- ①アウトドア・DIY趣味を生かして荒れた山林の開拓を自ら進める(一番楽しいから)
- ②里山の持つ人の心を開くチカラを生かし

た活動を広げる(一番やりがいがあるから)  
③株式投資の力を磨いて余力のある生活環境を作り出す(二番業務経験を生かせるから)

③について補足しますと、私はかつて経営コンサルティングやベンチャー経営にチャレンジしたのですが、思い描いた結果を出すことができませんでした。ただ、その頃ベンチャー企業を数百社取材して本を書いていました。それは多くのベンチャー経営者の話を聞き、経営の本質を深く分析する作業でした。その経験を生かし、本当に良い会社を見極める力を磨くことで、株式投資に生かせないかと考えたのです。

そこから、私にとってのConnecting dotsを実現すべく、10年ほどかけていろいろな方法を試しながら徹底して取り組みました。その結果、八王子の荒れた山林を自らの手で開拓して里山に変え、児童養護施設と共にも心にも余裕を持つて生活できる環境を実現することができました。

今どきの風潮として、ビジネスの力で社会課題を解決しよう、それを自分の仕事にしようという考え方がありますが、私はそこには慎重でした。社会課題は基本的にビジネスにならないから取り残されているのです。企業が既存事業の良い面だけをアピールする例や、社会課題に取り組みNPOやベンチャーがやがて自らの存続のために初心を見失う例はたくさんあります。本当

の成功は全体のごく一部というのがビジネスの常で、地道に継続して拡げることには価値がある社会課題克服のためにはビジネス偏重ではうまく行かないように思えました。そこで、資本のチカラにはできるだけ頼らず、同じ志を持つボランティアと未活用の自然のチカラを最大限に生かすことで、これまで行政や企業にもできなかった道を模索してみたいのです。

また、生活の中で余力ができてからボランティアを始めようという考えもあります。私の場合はその真逆でした。まず今できるボランティア活動を始めて、そのための余力をどう確保するかに知恵を絞っていました。なぜなら「自分ファースト」の人に周りが喜んで協力してくれるはずはなく、優先順位を間違えると心豊かな生活や社会には到達できないように思えたからです。

10年余りの試行錯誤の結果、私なりに見えてきたのはこんなことでした。一見豊かに見える現代都市社会そのものが大きなひずみを生み出していること。私自身も「自分の範囲を狭くしたらえわりとのつながりが希薄になってそのひずみを拡げていたこと。余力ができたならボランティアでもしようとか、与えられた環境がむしゃらに頑張ろうという姿勢では、いつまでたつても心豊かな生活や社会は手に入らないこと。それを実現する一つの方法は、人・自然・お金とのつながり方を見つめ直し、それらをただたくさん手に入れようとするのではなく人的資本・



>>> ANOTHER ACTIVITY—もう一つの活動から広がる世界



【写真上】 広場を切り拓いて里山大運動会



【写真右】 斜面に畑を開墾して種まき

自然資本・金融資本としてのチカラを再発見し、3つの資本を意識的につなげてさらに大きなチカラを発揮させることです。

よりたくましく、  
よりすこやかに

私たちが東京里山開拓団では、「よりたくましく、よりすこやかに」という運営方針を掲げています。この言葉は、2008年に絵本作家のかこさとしさんに当団体立上げの構想をお伝えした際に頂いたものです。かこさとしさんは、戦闘機乗りにあこがれた少年時代を経て、戦後の失意の中で民間企業研究者として働きながら、休日は川崎の貧しい子どもたちの遊び相手をするボランティア活動に没頭されました。その時に描いた紙芝居がたまたま出版社の目に留まり、やがて日本を代表する絵本作家、子ども



ツリーハウスの壁に思い思いの窓を取り付け

の遊び研究家の道を歩んで行かれました。

尊敬する先達から未来への道しるべを頂いた私は、現代都市社会にあつて「よりたくましく、よりすこやかに生きる」とはどういうことなのか、何をすればいいのかわからずと考え続けました。

世の中には大人が子どもたちに勉強や仕事、社会、自然環境などを教える活動がたくさんありますが、私にはそれだけで子どもたちがよりたくましくすこやかに生きていけるようになるとは思いませんでした。むしろ、現代社会の椅子取りゲームのノウハウを伝えているだけで、マクロ的視点で見たら結局は誰かが椅子に座れても誰かが座れなくなるだけのようにも見えました。

現実には厳しく、誰でもあつても受験、就職、結婚、仕事に失敗するかもしれないが、どんな結果であれ、必ず乗り越えて生き抜いていかなければなりません。そうなれることこそが、よりたくましく、よりすこやかに生きることはないかと考えたのです。

では、どうすれば厳しい現実を乗り越えて生きていけるのか。子どもたちにその力を身につけてもらうため、私たちが貢献できることは何か。思考と試行錯誤の末に思い至ったのはこんなところでした――。

ここ里山では、現代都市社会で重要とされる所屬も肩書もお金も年齢も価値がなく、どんな人でも評価も差別もなく受け入れてくれます。ここでやっているのは、みんなを体を動かして、飯を食って、遊んで、おし

やべりして、ひと休みするというごく平凡なことです。

それなのに、その一つ一つが里山ではあまりにもきらきらと輝いて、楽しく美しく感じられるのです。木の根っこを掘り起こす野良作業がとつともない達成感を、さつま芋一つがあつあつほくほくでお腹に染みわたる至福の満足感を、ハンモックに横たわり木漏れ日の光に包まれることが究極の安堵感<sup>あんどかん</sup>を、与えてくれます。誰かが一緒にいれば、そんな感覚を口に出さずとも表情だけで共有できます。

そう、ここは現実逃避の場なんかではありません。自分の何かを変えようとしなくともありのままいるだけで生きることそのものが楽しいと実感できる場、実はそんな生きるチカラを誰もが元々持っていたことに気づける場なのです。児童養護施設の子どもたちは、きつとこのことに誰よりも早く直感的に気づき、封印していた心を解き放つて、里山にはまっています。

私たちはこれからも、現代都市社会が放棄した荒れた山林を自ら伐り拓いて、子どもたちが自分を変えることを支援するのはなく、無理に変えようとしなくていい、むしろありのままであられることがいかに大切で価値あることを実感できる場を作り続けていきたいと考えています。それは、誰もがそんなふうにならざることを実感できる社会こそが、本当に来るべき心豊かな社会のはずと思えてならないからです。